

生保内中(仙北市)活性化選手権で提案「人生の峠越える勝負メシ」

合格祈願おでん、給食に「仙岩峠の茶屋」協力



仙北市田沢湖の生保内中学校(鈴木徹校長、84人)の生徒たちが昨年の「第6回秋田活性化中学生選手権」(秋田魁新報社主催)で提案した「合格祈願おでん」の企画が実現し、給食の時間に提供された。同市の国道46号沿いにあるドライブイン「仙岩峠の茶屋」を盛り上げ地域の活性化につなげる

ための方策として、名物の甘口おでんを売り込み、地元の若者ファンを増やそうというアイデア。提案に賛同した峠の茶屋の佐藤益久社長(59)の協力を受け、実現した。生徒が昨年夏、店舗前で約9時間にわたり利用客218人を調査したところ、県外客は158人で、仙北市民は5人だった。



市内5中学校の調査では、甘口おでんを食べたことがある生徒は17%にとどまったという。「子どもの時に食べたという記憶は将来のファン獲得につながる」と考え、「人生の峠を越える勝負メシ」として受験生の給食におでんを提供する企画を提案した。選手権の会場で発表を

聞いた佐藤社長は生徒の思いに感動し、協力を快諾。2月6日に鍋を持って従業員と共に生保内中を訪れ、前日から煮込んだおでんを温めて全校生徒と職員に振る舞った。

高校受験を控える3年生の教室では、佐藤社長が「創業から60周年の節目に中学生や地元の皆さんとつながってチャレンジできたことがうれしい。栄養豊富なおでんを食べて受験や大事な時に備えてほしい」とあいさつ。生徒は大根や卵、昆布などの味の染み込んだおでんを味わった。

高田芽衣さんは「峠の茶屋のおでんは食べたことがなかったが、お客さんが全国から訪れると聞いていたので楽しみにしていた」、選手権に出場した田口天晴さんは「卵に味が染みておいしい。

甘口のおでんはどの年代にも好まれると思う」と喜んでいた。(石塚陽子)

(令和8年2月27日(金) 秋田さきがけ新聞から一部抜粋)